

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 6日現在

機関番号：13601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21652008

研究課題名（和文）近代日本石膏像受容史研究—起源と展開—

研究課題名（英文）Reception of the Plaster Sculpture in Modern Japan

研究代表者

金井 直 (KANAI TADASHI)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：10456494

研究成果の概要（和文）：18世紀ヨーロッパから現代の日本にいたる石膏像の受容史を調査することで、西洋近代の古典概念や美術教育の方法が、いかに近現代の日本に普及し、かつ変容を遂げたか、他の東アジア各国、アメリカ合衆国の事例にも触れつつ、分析した。確認されたのは、石膏像が専らデッサンの対象として利用された日本においては、図像学的に曖昧な像が普及し、また、様式的に自由な石膏デッサンが繰り広げられたという事実である。このことは規範的な古典主義からの逸脱ではあるが、一方で、東アジア地域通有の文化受容のプロセスとして歴史的に評価されるべきである。

研究成果の概要（英文）：Examining the reception history of plaster sculpture from the 18th century Europe to contemporary Japan, and referring those of East Asian countries and the United States, this research clarified the diffusion and the transformation of the concept of the classic and the method of art education in Japan. It was noticed that the iconographical identity of plaster sculptures and the drawing style of them became obscure and arbitrary in Japan because the plaster sculptures were exclusively used there as the objects for drawing. This is a deviation from normative classicism, but should be evaluated historically as a common process of cultural reception in East Asia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	0	900,000
2010年度	800,000	0	800,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	330,000	3,130,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：近代彫刻史、美術教育、アカデミズム、美術史

1. 研究開始当初の背景

石膏像、石膏デッサンには、一般に、初歩の、あるいは過去の美術教育の手段といったイメージが強く、創造性の発露をたどる近現代美術史の言説や、自由な表現を学習者に期待

する今日の美術教育の現場においては、その存在はコンヴェンショナルかつ通俗的（あるいは過度にアカデミック）なものとして、排除される傾向が強い。もちろん、この「排除」の構造に着目した研

究や、近代美術教育史という観点から石膏デッサンに注目した研究、明治期に輸入された石膏像（東京大学工学部所蔵作品など）に対する個別の調査研究等は認められるが、石膏像をめぐる事象そのものを、18世紀ヨーロッパから20世紀の東アジアにいたる受容史のなかで俯瞰的にとらえる試みは、これまで見られなかった。

2. 研究の目的

本研究は日本における石膏像の受容・普及・変容の経緯と特質を、ヨーロッパやアジア各国の事例と比較しつつ明らかにするものである。具体的には、

- (1)石膏像のレパートリーの変遷・異同を、時代・地域の広がりの中で調査・分析する。
- (2)石膏像の利用方法の変遷・異同を、時代・地域の広がりの中で調査・分析する。

それによって、

- (3)日本における石膏像・石膏デッサンの歴史を、ヨーロッパの視覚制度の移入・伝播の事例として受動的、制限的にとらえるのではなく、東アジア各国とも連動する、異文化の翻訳・解釈のプロセスとして、つまり多元的な文化混交の実例として、評価する。

3. 研究の方法

- (1)国内の美術教育機関調査
所蔵石膏像の来歴・利活用状況の調査および関係者への聞き取り

- (2)国内の美術館調査
石膏像を描いた絵画・デッサンの調査

- (3)国内の石膏像関連業調査
製造・販売業者への取材

- (4)国外調査
美術教育機関および石膏像コレクションをもつ美術館における資料調査および聞き取り。対象国：イタリア、フランス、アメリカ合衆国、台湾、韓国、中国

- (5)文献調査
石膏像販売カタログなど一次資料の収集および先行研究の分析

4. 研究成果

- (1)石膏像レパートリーの変遷・異同の確認

①ヨーロッパには18世紀末～19世紀初頭の新古典主義の影響を感じさせる石膏像コレクション（アカデミー型。トリノ、ローマ、ナポリ等のアカデミーで実地調査）と19世紀後半からのコレクション（美術史学・考古学型。ボローニャ市立考古学博物館やローマ大学において実地調査）があるのに対し、日本のコレクション（主に大学の所蔵品）の場合、それらが不分明である点が確認された。これは収集自体が小規模であったためでもあるが、約半世紀のあいだにアカデミズム系の像（1876年創立の工部美術学校に由来する）と、ルーヴル美術館からの購入品、さらにボストン美術館からの移譲品（1934年、同地で展示機会のない石膏像が東京美術学校に提供された）、また、一般の石膏像業者からの像が、あいついで輸入され、さらに日本国内で再複製されたがゆえの混交と言えよう（再複製の進展、つまり石膏像の流通拡大の状況については、専門業者の商品カタログの分析を通して確認した）。

②また、日本では図像学的な関心・制約が希薄であるため（アリアス、メジチといった通称の普及が証左）、個々の石膏像の評価が専ら細部の精度によって語られ、逆に、オリジナル彫刻と比較する意識が弱い点も、関係者への聞き取りを通して再確認された。「大顔面」をはじめ、「面取り」をほどこした像の普及が著しいのも（ヨーロッパにおいてはきわめて限定的）、図像学的無関心の反映として興味深い。同様の傾向は東アジア域内でも確認された（日本統治下の教育・文化政策に起因するものと思われる）。

- (2)石膏像の利用方法の変遷・異同の確認

①石膏像を美術史学・考古学の資料として利用するヨーロッパ、アメリカの伝統（様式史的体系性をもった収集）について調査をおこなった。とくにドイツ、イタリアにおいては、欠損したオリジナル部分を補う復元案が石膏像において示されるなど、学術性の高い利用が行われていた。同様の伝統・実践を日本において確認することはできなかった（ただし、日本・東洋美術の領域では事例が認められだろう。要調査としたい）。

②石膏デッサンについて、ヨーロッパ、アメリカでは輪郭線を重視した古典主義的な手法が主であり、それゆえに、古典主義的な教育方法がとられない現在にあつては、石膏デッサンに対する関心もほとんど見出せない状況である（趣味としてのデッサンの領域に限られている）。一方、石膏デッサンの古典主義的特質が十分に認識されていなかった日本においては、その様式はむしろ輪郭線にこだわることなく変化を続け、明暗の諧調も様々に、とくに第二次世界大戦後は、美術系大学の受験科目として一般化していった（石

膏デッサン教本の増大)。同様の「様式化」は、台湾・韓国・中国においても認められる（日本を含め各国のデッサン教本の内容の類似）。一方で、北京、中央美術学院で実見した石膏デッサンはより大きなフォーマットに強い運筆で描かれており、ペインタリーな、さらに言えば、表現主義的な特徴を示していた点には留意したい。詳細に分析すれば、アジア域内のデッサンにもさらに興味深い差異が見出しうるはずである。

③石膏像を描写する絵画作品について、日本国内の事例を調査。リスト化を進め、また個々の作家の教育的背景、制作環境等を確認した。明らかになったのは、明治期には石膏像はアトリエの点景として西洋芸術の象徴のように描かれているのに対し（湯浅一郎の《画室》が好例）、大正・昭和期に入ると、静物画や室内風景のモチーフとして一般化していく傾向である。後者（大正・昭和期）は、セザンヌ、マティスの室内面に発し戦間期の古典主義回帰にいたる西洋絵画の経験と重なるが、前者（明治期）は近代日本特有の事例として注目される。

なお、1960年代以降の日本の現代美術には、石膏像自体を利用する事例があるが、これは同時期のヨーロッパ美術の傾向に通じるものである（例：パオリーニやクネリスなどアルテ・ポーヴェラ）。

(3) その他の成果

ローマ、アカデミア・ディ・サン・ルーカにおいて、歴史的石膏像の洗浄について、修復家ファビオ・ボルツォ氏より実作に即して説明を受けた。また、ナポリとミラノのアカデミーやローマ大学においては、修復・再展示活動の進捗状況について聴取。日本国内に遺る初期石膏像の今後の利活用に資する情報を得ることができた。

(4) 総合的な観点（研究成果の位置づけ）

上述の調査研究を通して、日本における石膏像・石膏デッサンの歴史を、ヨーロッパの視覚制度の移入・伝播の事例として受動的、制限的にとらえるのではなく、東アジア各国とも連動する、異文化の翻訳・解釈のプロセスとして、つまり相互的な文化混交の実例として、記述・評価することができた。

本研究が日本および東アジア各国の近代美術史・美術教育史の、見落とされがちな一局面を明らかにしたことは確かであろう。しかし、そうしたリヴィジョニズム的美術史以上に注目すべきは、西洋古典主義そのものの限界と（想外の）可能性を、非西洋圏からの視点で更新・再解釈する可能性を示しえた点であろう。つまり、日本・台湾・韓国・中国における石膏像・石膏デッサンの受容状況は、一元的な「欧化」のプロセスとしてではなく、

ヨーロッパの（台湾・韓国にとってはさらに近代日本の）制度の「奪取」の歴史として読み換えることができる点である。こうしたポストコロニアル的問題圏に意欲的に立ち入ることで、本研究のアクチュアリティは、国際的な観点においても、文化研究の一成果として、いっそう確かなものとなるはずである。

(5) 展望

①本研究のアクチュアリティを高めるためには、他国とりわけアジア地域の研究者との連携が不可欠であろう。その前提として、本研究成果の他言語による公表を進めたい。

②本研究をより実証的なものとするために、日本国内の石膏像製作の歴史、とりわけ各社が原型とする像の来歴について、調査を進めたかったが、明確な情報をえることが難しかった（戦火による資料消失などが理由とされた）。関係者との調整を進めつつ、調査を継続したい。

③本研究において対象とした石膏像は、厳密に言えば石膏模像、すなわち複製品であったが、これとは別に、ブロンズ像や大理石像の原型となる、いわゆる石膏原型が存在する。1800年前後の石膏像を調査する際、イタリアのアカデミー等において、この種の像をくりかえし実見した（とりわけ、ポッサーニョのアントニオ・カノーヴァのジブソテカと、フィレンツェ、アカデミア美術館のロレンツォ・バルトリーニのジブソテカ）。日本国内にも近現代の彫刻家の石膏原型が多数保存されており、これらの取り扱いについても、歴史と現状をふまえて調査することは、広く石膏像文化を考察するうえで、重要な研究活動となろう（オリジナル・複製・著作権をめぐる意識と実践の歴史の変遷をあとづけることができるはずである）。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 金井直、石膏模像の機能と石膏デッサンの様式、信州大学人文学部人文科学論集〈文化コミュニケーション学科編〉、第46号、127-139、2012、査読有 <http://hdl.handle.net/10091/15666>
- ② 金井直、石膏像小史 一起源と変容、美術フォーラム21、20号、87-92、2009、査読無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金井 直 (KANAI TADASHI)
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号：10456494

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：